

「木石」

秋雲のほつれかかつてゐるあたり

腕を吊る白布にすがる秋の蜂

草の実の飛んですがつて晩年へ

銀杏降れ貧乏者の脳天に

菊人形となる前の首置いてある

松手入れ終へたり修羅の家深閑

日蓮忌雲のまんだら見てすごす

ほんのりとはこのぎんなんの色ならん

りんご灯る空気を美しくせんと

青空を容れたる露がふるへだす

露は露の力をひかるばかりなり

露をおく棘のしろがねびかりかな

山彦や吹かれてゆがむ露の玉

りうりうと露りんりと志

萩すすきいたける五十猛神社過ぎて霧

竜胆に夜雨の激しよ羽黒山

南蛮炉に火を飼ふ秋のしぐれかな

法螺貝を息の暴るる露こだま

冬支度終え月山の山伏は

冷やかや木石に目のごとき窪

余録

「青き踏め」 二十六句

目高数ふ朝の動体視力かな

円は永遠めだかの群は鉢に添ひ

炎天にマスクの上の目が細る

冷房ぬるし銃めく新型体温計

プラスチックの微笑 客室乗務員のマスク

百合の香やアクリル板といふきれい

加湿器の霧きよらかに百合香る

死者の息ぽつと灯りぬ墓

仕事なし秋のビーサンうすつぺら

逆しまに秋の熱帯魚のうれひ

秋の声聞こえぬ無菌室にゐる